シリーズ
葬送儀礼の問題を考える

第5回　喪の色について――白黒の世界

白色喪服の伝統

今回は、喪服の色を題材に、葬儀に対するイメージについて、考えてみたいと思います。

喪を象徴するものの一つに、服装があります。今日、喪服といえば黒色・洋装が主流ですが、実は、その歴史は浅く、明治以降のことに過ぎません。それ以前は、長らく白色の時代が続いていました。

日本における白色喪服の歴史は古く、『隋書』倭国伝に「素服（白布製の喪服）」を着用している様子が記されています。また『日本書紀』には、斉明天皇崩御の際、皇太子であった中大兄皇子が「素服」を着用したとあり、七世紀には【喪の色＝白】と認識されていたことが分かります。

しかし、この素服は日本独自のものではありません。漢代の中国においては、『礼記』喪服少記に喪服の詳細が規定されており、文化的影響を受けていた周辺諸国もそれに倣ったと考えられます。

日本でも中国の制度に倣い、喪葬令が定められました。養老律令喪葬令（七一八年、七五七年施行）において、天皇は、二親等以上の葬儀に際して「錫紵を着る」と定められたのです。これは、喪葬令の手本となった唐の皇帝が、錫衰を着ていたからです。

唐でいう「錫」とは、白い麻布を指していたのですが、文献のみで学んだ日本人は、それを金属のスズと勘違いし、墨染めにしてしまいました。こうした勘違いから、天皇の喪服は、白色から一転して墨染め色[1]となり、貴族階級の喪服もそれに倣って黒系統に変化してしまったの

です。

しかしながら、『万葉集』などには白い麻の喪服が登場しています。したがって、当時は、特別な葬儀以外は白い喪服が一般的だったと考えられます。

このように、【喪の色＝白】という慣習は脈々と受け継がれ、室町時代には再び、上流階級にも白い喪服が復活しました。もちろん、庶民は明治時代に至るまで白い喪服を着ることが常だったのです。

黒色喪服の登場

日本における洋装の歴史は、明治五年（一八七二）の太政官布告第三七三号において、官人の洋装が義務付けられたことに始まります。しかし、人々が洋装に慣れていないことから、明治時代の国葬では、その都度、官報で「喪服の心得」が示されました。

それによると、皇族以下上流階級の者は、大礼服を着用した上、喪章として黒のネクタイと手袋の着用などが義務付けられました。また、大礼服を持っていない者は、通常礼服に黒い布地で帽帯と左腕章などを付けなければなりませんでした。

そして、明治十九年（一八八六）、女性の洋装喪服が黒のドレスと定められたことによって、近代日本における喪服＝黒色・洋装という、新たな歴史が始まったのです。

しかし、喪服の完全な洋装化には、時間がかかりました。特に、大正～戦前までは過渡期といえ、明治以前の喪服（白色・和服）を継承しつつも、黒色の影響から次第に、男性は紋付羽織袴、女性は黒紋付に黒帯を着用するようになったのでした。

（仏教音楽・儀礼研究室研究員　多村至恩）

白色が持つ意味

本願寺第九代実如上人の葬送儀礼を記した『実如上人闍維中陰録』[2]という書があります。そこには、上人の葬儀や中陰の際、人々の装束は「白小袖」であったことが記載されています。通常は「黒小袖」でしたので、葬送中陰にあたってそれとは異なる色の小袖が着用されたことが分かります。[3]

しかし、白小袖は、喪服用の装束というわけではありませんでした。『本願寺作法之次第』第一六五条には、毎月二十八日の親鸞聖人のご命日（旧暦）に、白小袖が着用されていたことが記されています。十一月のご命日法要は、言うまでもなく報恩講です。つまりこの装束は、特別な時に着る〝正装〟だったのです。

白小袖は、時代が下がると、武士が切腹する時に用いられたり、花嫁衣装の白無垢に姿を変えたりしています。白は、単なる〝喪の色〟ではありませんでした。

色彩感覚は、時代によって変化します。白色は、平安時代になると、聖なる色・最高の色・中心の色とされ、他の色と隔絶した位置を占めるようになったと言われています。白色がそのように〝聖なる

色〟と観念された時代にあって、葬儀の際にその色を着用したということは、人の死がどのように受け止められていたのかを端的に物語っています。

すなわち、当時の人々は、葬送儀礼を神聖なものと認識して、最高の色をまとったということです。それによって、亡き人へ最高の敬意を表したということでしょう。

黒色の台頭と葬送儀礼の本義

先に述べましたように、明治以降、喪服は黒色になりました。現在ではこれが完全に定着し、それどころか黒服の領域が次第に広がっているように見受けられます。

かつて、黒い喪服を着ていたのは血縁の濃い親族だけでした。手伝いの人は、地味な服に喪章を付けるだけでした。また、通夜に喪服を着ることは、遺族に対して失礼にあたると言われたものでした。これは、通夜とは、死去の知らせを聞いて急ぎ弔問にかけつけることから、平服で、という暗黙の了解があったからです。

ところが今では、土地柄にもよりましょうが、全体的な傾向として、通夜にも黒い喪服を着る人が多くなり、葬儀の手伝い人も黒服になりました。また、年忌や永代経に参詣する時も黒、という方も増えてきました。

白色が最高の色という平安時代以降の考えが後退し、西洋流のブラック・フォーマルが浸透してきたということですが、重要なのは、その色がフォーマルな色・高貴な色であるという感覚を人々が有しているかどうか、でしょう。

単に、黒服だとあれこれ考えなくてもいいから楽だ、というのでは、葬送儀礼の持つ意味といったものが見えなくなってしまいます。また、黒という色は、暗闇とか不吉を連想させる色でもありますので、葬儀をそうした感覚で捉えてしまう危険性をはらんでいるように思います。

【喪の色＝黒】となった現在、人の死をどのようなものと観念するのか、ということが問われてくるのだと思います。

（仏教音楽・儀礼研究室研究協力者　山田雅教）

1　現在、僧侶の喪服といえば、鈍色（濃い灰色）の装束ですが、この色はここを源流としています。

2　「闇維」はパーリ語ジャーペータの音写で、一般的には「荼毘」と訳されます。

3　この上に、直綴（腰のあたりから裳のある裾が付けられている衣）や裳付衣（親鸞聖人の鏡御影を参照してください）といった法衣を着用しました。

※タイトル部分の図は徳力善雪作「親鸞聖人絵伝」第八幅（本願寺蔵、部分）